

令和3年度(第76回)文化庁芸術祭主催公演 アジアオーケストラウィーク 2021 静寂から感動へ——未来へつなぐハーモニ

1946年、戦後まもなくに始まり、75年の歴史を誇る芸術の祭典「文化庁芸術祭」。その核となる文化庁芸術祭主催公演「アジアオーケストラウィーク」(以下、AOW)は2002年より、東アジア・アセアン・中央アジア・オセアニアの各国を代表するオーケストラを招き、延べ16に及ぶ国と地域より50以上の団体の演奏を行ってきた。従来はアジア各地からオーケストラを招いていたが、昨今の事情もあり、国内のオーケストラ(大阪フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団)を招いて開催。アジアで生まれた交響曲やヨーロッパ伝統の名曲など、20年目の節目にふさわしいプログラムが4夜連続で演奏される。

大阪フィルハーモニー交響楽団(10月4日・月)は、ベトナムの作曲家、リンの《爽やかな風》、細川俊夫の《月夜の蓮》を演奏。巨匠、秋山和慶のベートーヴェン交響曲第5番《運命》とともに期待大。

藤岡幸夫指揮の読売日本交響楽団(10月5日・火)は、韓国出身の作曲家、ユン・イサン(尹伊山)の《Bara》でスタート。ユンの作品は、これまでに《光州よ、永遠に》などがAOWで演奏されている。また、今回成田達輝

を独奏に迎える陳鋼&何占豪のヴァイオリン協奏曲《梁山伯と祝英台》は中国の作品で、AOWでは過去に3回、演奏されている。邦人作品を積極的に紹介している藤岡と共に、成田の新しいレパートリーとして注目しよう。また、ドヴォルザークの交響曲第9番《新世界より》は数々のスコアを研究している藤岡ならではの演奏が楽しみ。

東京フィルハーモニー交響楽団(10月6日・水)は気鋭の三ツ橋敬子が、富田勲の作品を取り上げる。1960年代に作られたジャングル大帝へのオマージュに満ちた交響詩《新・ジャングル大帝》2009年《語りと歌は大山

大輔》。そして東京2020オリンピックク開会式で取り上げられ話題となった《ドクター・コッペリウス》も。間に演奏されるドビュッシーの《月の光》もかつて富田がシンセサイザー作品に編曲した作品だ。そして、更

にはストラヴィンスキーの組曲《火の鳥》(1919年版)を加えている。バレエ《火の鳥》を見た手塚治虫が大作の《火の鳥》を描くきっかけとなった、このことで、幾つかの作品の結節点ともなるコンサート。

セントラル愛知交響楽団(10月7日・木)は辻彩奈が貴志康一のヴァイオリン協奏曲を引っ下げ登場。若い辻が早速だった貴志の作品にどのように取り組むかに注目。また、交響曲《勝どきと平和》など、山田耕筰作品を積極的に演奏している指揮者の

角田鋼亮が《序曲》を取り上げる。山田、貴志、ドビュッシー(交響詩《海》)、ペルト《東洋と西洋》と、20世紀の音楽の流れを楽しむことができるプログラムだ。

AOWは、チケットが低廉であることもうれしい。S席が3000円、A席2000円、B席1000円の他、ペア券(S席2枚)5000円、S席4公演セット券9200円/2公演セット券5000円も発売されている。



▲角田鋼亮指揮、セントラル愛知交響楽団と共演する辻彩奈



▲藤岡幸夫指揮、読売日本交響楽団と共演する成田達輝



▲ソリストに成田達輝を迎え、陳鋼&何占豪のヴァイオリン協奏曲《梁山伯と祝英台》を演奏する読売日本交響楽団

■チケット/チケットぴあ 0570-02-9999 (S席4公演セット券、各1回券 Pコード200-773 S席2公演セット券 Pコード782-255)、ローソンチケット(Lコード:34077)、イープラス、東京オペラシティ チケットセンター 03-5353-9999